

事務局の池原参事官が資料 25-1(20 年度概算要求・重点事項)を説明(池原参事官の説明について、資料25 - 1に注記を加えた。また、19年度の資料を基に見え消しの20年度資料も作った。)した後、下記のような質疑応答があった。

松尾:一年やそこらで重点事項が変わるわけでは御座いません。其れに対して、新たな進展に相当するものを付け加えたと言う形になっております。例えば、下の重点事項の(1)のところについて言えば、ロケットの多様化というようなことが其れに当たります。それから、次のページの(3)の探査のところでは、国際的な趨勢に触れて、活動拡大に繋がる宇宙探査といったようなことを付け加えさせて頂いていると、そう言う状況で御座います。委員の先生方とは、懇談¹を通じて色々議論致して居りますけれど、此処で何か、補足的なご発言が有れば受けたいと思います。

青江:全くの感想ですけど、そう言う形で、こー、新しい要請に尽くして、此れも重要と言う形で。それが、此処を見て、つくづく、やっぱり、「あれも・此れも」だナーと、云う感想。だからと言って、そいじゃ何処を削って、もっと絞り込むかと云うと、どれも削り難いしネー。もう、困ったナーと。全くの感想なのですけれど、此れを受けた行政庁の方も、その、あれも此れもだから、本当どうするのですかと。それで、「限

られた財布の中でどうしますか。」と言って、困るのではないナーと。思ってんですけどネー。まあ、そう云うことなんですネー。

池上:まあ、此れも感想に成りますが、「(4)宇宙開発基盤の強化」の最後のところ、産業について書いてあり、此れは非常に結構、今、流れとしては結構だと思うんですけど。「宇宙利用・産業化の強力な推進により、」と云う風に言った場合、宇宙開発委員会で強力的に推進すると云うのは、どういうイメージを考えているのですか。

池原:此れは、JAXAにおいて、色々産業界と一緒に成って開発を進めております。特にロケットですとか衛星の開発においては、その下に御座います、「民間への技術移転」或は、開発自体に、部品なども含まれており、そういったものについての連携を、此れまで以上にきちんと戦略を持って、連携をしていくと云うことが必要ではないかと。

池上:そうすると、連携とか支援と云うのは良いんですね、そうすると。

森尾:一寸細かなことなのですが、1番目の輸送系ですが、二つ「」があって、一つは、「H- Aロケットの信頼性を高めて、確実に打上げ実績を積み上げる。」と云うこと。もう一つは、小型、中型。二番目の方は、GXと固体小型と、具体的な計画というのが解るのですけれども、一番目の方は、JAXAとしてはH- Aロケットの信頼性を高めるために色々な企画をやられると思うのですが、同時にH- Bと云うのムニャムニャ。此の書き振りなのだけれど、H- Aロケットのことし

¹ 定例会議の終わりに、「本日の懇談会で...云々」と発言されたことが何回かあった。数回の議論を経て、今回の資料がまとまったものと思われる。

か書いて無いようにも見えるが、何かもう一寸、ムニャムニャ。

青江: 此処に書いてあることは、H- BはAを確実に確立し、維持していく、と云うことに比べると、プライオリティは落ちると云う風に私は理解しておるんですがね。だから此処は書くべきではないと、明確に其処は段差があると、H- AとBは。と云う認識なんです。

森尾: 実際に使おうとして、これから予算を作るわけですよ、そうすると、使おうとする予算も、H- Bに関わる予算よりも、H- Aの信頼性を高めることに関わる予算の方が増えると云うことか。

青江: 金額はですね、絶対額はどうか解りません。ただ、緊急度と云うか、プライオリティと言いましょ、Aのために必要な、此処に書いてあること等のために必要な予算措置と云うものの方を、明確な形で段差をつけてより優先順位を高めた形で対応した上で、Bはやる。だから、HTVの打上げ時期、H- Bの新規の打上げ時期、こういったことも、今申し上げましたような、プライオリティの中で考えるべき、で、一方、上に書いてある、「なお、国際協調を図り所要の対応」と云うこととの間のバランス、此れはかなり微妙なバランスだと思えますけれど、其処は難しいことが出てくるとは思いますが、けれどもね。しかし、輸送系の問題としてのプライオリティは此処ではっきりさせておくと、云うことではないかと思うんですけどね。

松尾: まあ、この話は、誰が質問して、誰が答えるかと云うのが難

しいところなのですが、此れについては、私も青江委員と同じ様な理解だと思っています。だから、「あれも、此れも」と云う話、さっき有りましたけども、悩んだ結果の成果は多少は此処に盛り込まれていると云うことだと云う風に思っています。

池上: 宇宙開発委員会はこのよう云う形で出して、後、具体的に色々ご努力をされているのは研究開発局長並びに文科省だと思うのですが、どんな様な風に、此れをご覧になっておられるのでしょうか。今年、来年について、見通しみたいなもの何かあるのでしょうか。

藤田: ご承知のように、未だ、参議院選挙が御座いました関係で、20年度の予算要求に向けました政府のシーリング枠と云うのは未だ決まって居らない状況で御座います。そう云う意味で、予算要求が一体どのくらい出来るのかと云うのは、必ずしも良く解らない訳ですが、まあ、例年、昨年・19年度から見ても、予算の状況は非常に厳しいと云う状況で御座いますので、此処に書いてあることについて、予算の枠の中でメリハリを付けながら、更にメリハリを付けながら、要求を考えていると云うことになろうかと思っております。それから、国家基幹技術の関係、H- A、H- Bの関係については、いずれも国家基幹技術として、18年度からの5年間に第3期の科学技術基本計画中の5年間に、集中的な資金投資をする事と云うことになってますので、まあ、あの一、信頼性を高めると云う、H- Aの「信頼性を高めて確実に打上げ実績を積み上げて行く」と云うことについては、予算

と云う風なことより、むしろ、きちっと、信頼性向上のための様々な措置を講じて行くと言うことで、必ずしも予算をそれほど必要とするかは兎も角として、きちっとやっていこうと思っておりますが、H- Bについても予算の枠の中で、出来る限り、私どもとしても、努力をさせていただきたいと云う風に思っております。それは正に、国際宇宙ステーション計画を、国際約束をきちっと果たすと云う中で、ぎりぎりのところをやらせて頂きたいと云う風に思っております。

松尾: どうも有難う御座いました。

青江: 念のためと言いますか、此処へ4項目上げて、尚書きでISSについて書いてあると云うところは勘案頂くと良いかと思えますけどね。そう云う気持ちだと。

藤田: お気持ちは良く理解いたしました。

青江: あはははは。

青江: 国際約束と云うのはそんなもんだと。(無言のあと)無い袖が振れないときにはしょうがないじゃないかと。

松尾: 其れは、此処では、そんなもんだと云うレベルに留めます。此れは決定事項ですので、此れをもって決定とさせて。よろしゅう御座いますでしょうか。